

doingの価値、beingの価値

古 田 晴 彦

格差社会、成果主義、競争原理、自己責任……このような言葉が毎日のように私たちの目や耳に飛び込んでくるようになった。出発の平等が保障されているのならまだしも、親の経済力によって子どもの将来が決定されてしまうような「格差の固定化」も指摘されている。1986年の労働者派遣法の施行により、労働市場は多様化・複雑化し、働き続けているのに貧困から抜け出せない「ワーキング・プア」と呼ばれる人々の増加も深刻な問題となっている。貧困は、その全てを「自己責任」と言い切れる問題ではない。個人がバラバラにされたことにより、構造的な問題が見えにくくなっている。

気になっていることがある。スクール・モットーであるMastery for Serviceも、「社会に貢献できる実力を身につける」、このことばかりが強調されすぎているのではないか。貢献する、役に立つ、力を持つ… これらは言わば、何かをすることの価値、doingの価値である。

「あなたは、あなただから尊い」「あなたは存在しているだけで価値がある」「あなたの存在が私を支えている」存在の価値、beingの価値を、イエス・キリストは聖書の中から私たちに投げかけているはずである。新月徽の意味についても、「満月を目指そう!」ということばかりが強調されているように感じる。より重要なメッセージは、「自己中心で凝り固まっている私たちの内に光はない。神からの光を反射することによって、暗い社会を少しでも照らす存在となりたい」という人間理解と祈りの中に込められている。

自分のエネルギーが充実しているときに、刺激を与えてくれる人は沢山いる。しかし、自分が弱っているときに、「側にいてほしい」と思える人は少ない。高等部出身の大学4年生は、私が初めての学年主任として送り出した人たちである。beingの価値が、自分にも分かり、それを見ている周囲の人にも分かる、そんな「ひとり」として社会に出ていってほしい。

「わたしの目にあなたは価高く、貴い」(旧約聖書 イザヤ書 43:4)

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」(マタイ 11:28)

(高等部教諭)